SOAS Library

SOAS Library

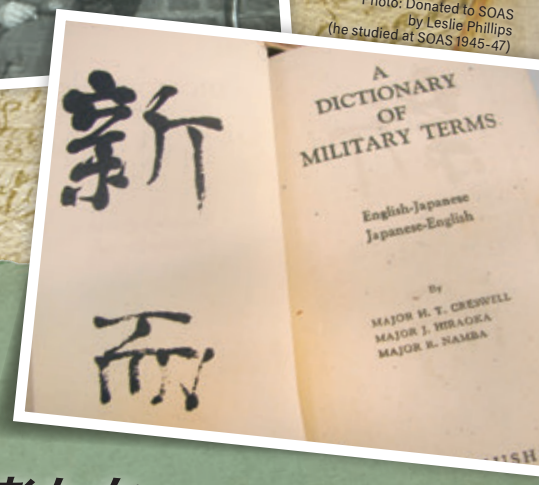


Photo: Donated to SOAS by Leslie Phillips (he studied at SOAS 1945-47)

戦時中の英国で日本語を学んだ若者たち

ダリッジ・ボーイズとSOASのブレッチリー・ガールズ

ロンドン中心部、ブルームズベリー。20世紀初めには作家バージニア・ウルフや経済学者ジョン・メイナード・ケインズら芸術家や学者たちが集ったこの地区に、英国における日本語教育を先導するロンドン大学SOAS（東洋アフリカ研究学院）がある。昨年、日本研究開始100周年を迎えた同大学は、現在も多くの日本研究者や日本語話者を輩出していることでその名を馳せているが、ここで第二次大戦中に敵国である日本の言語を学んだ若者たちがいたことは、あまり知られていないのではないだろうか。今回は、ロンドン南東部にあるパブリック・スクール、ダリッジ・カレッジに居を構え、SOASに通って日本語を習得した若者たち、通称「ダリッジ・ボーイズ」と、同じくSOASで日本語を短期集中で学んだ後に政府暗号学校ブレッチリー・パークに勤務した「SOASのブレッチリー・ガールズ」を中心に、戦時中の英国における日本語教育と、現在に続く日英交流の萌芽を見ていきたい。

[取材協力]
- バーバラ・ピッツィコーニさん
  SOAS, Japan and Korea Section, Department of East Asian Languages and Culture Reader in Applied Japanese Linguistics
  1996年よりSOASで日本語、日本語教授法、日本語学などを教える。2014年～17年にはHead of the Japan & Korea, China & Inner Asia departmentsも務める。
- Bletchley Park

[参考文献]
- 「戦中ロンドン日本語学校」（中公新書）大庭 定男著
- 「The Debs of Bletchley Park and Other Stories」Michael Smith著
- The Bletchley Park Trust Reports「Japanese Codes」Sue Jarvis著
- Dulwich Boys and Beyond: 100 Years of Japanese Studies at SOAS (Recording)
- Bletchley Park, Podcast 56: Enter Japan など

戦後の日英関係の架け橋に

ダリッジ・ボーイズと日本語特別コースの若者たち

2016年2月1日、ロンドン大学SOAS（東洋アフリカ研究学院）で日本研究開始100周年を記念し、「ダリッジ・ボーイズとその後」と題したイベントが行われた。1942年から43年にかけてSOASで日本語を学んだ30人の若者たち、通称「ダリッジ・ボーイズ」。彼らから始まった戦時中の日本語特別コースは、日本語を理解する情報将校たちを育成するだけでなく、戦後の日英関係を支える礎となる人材を生み出すこととなった。

SOAS Library

戦時中にSOASの日本語特別コースで学んだ生徒たち

火急を要する日本語要員の確保

ダリッジ・ボーイズについて語る前に、まずは戦前の英国における日本語教育について簡単にたどってみよう。1903年、ロンドンに英国初となる日本語学校が設立された。高等教育機関では、1917年、SOAS（当初は東洋研究所（The School of Oriental Studies））に日本学科が開設されたのが始まりである。講師はたったの2人。元々、小規模ではあったが、特に日英同盟が1923年に失効した後は生徒数も減り、1936年から41年にかけては12、17、15、6、5人という有様だった。その風向きが変わったのが1941年の太平洋戦争勃発後。日本を含む枢軸国側と、英米など連合国側が戦ったこの戦争で、日本軍が1941年12月に英領マレー半島北部に上陸、同半島を縦断し、翌年2月にシンガポールを占領するに至って、英国防省は日本語要員の不足を痛感するようになる。

SOASで行われた日本語特訓

1942年5月、それまでも国防省や外務省に日本語教育の必要性を訴え続けてきたSOASに、日本語特別コースが設立された。できるだけ早く日本語要員を前線に送る必要があったため、6カ月～20カ月という短期集中型。1942年から1947年まで続き、計648人が巣立っていった。同コースは主に5つに大別される。

❶ 政府給費生コース
シックス・フォーム（高等教育進学準備課程）で学ぶ17～18歳の学生を対象としたもので、期間は20カ月。30人の生徒が日本語の読み書き全般を網羅した後、軍隊用語を学んだ。

❷ 訊問官養成コース
戦場における俘虜の取り調べを行う訊問官を養成するためのコースで、聞き取り、会話の特訓が中心。期間は約13～20カ月。大学を卒業し、語学に素養のある軍人の中から選抜された。

❸ 翻訳官養成コース
日本軍から接収した文書などを読む翻訳官を養成するためのコースで、読み書きを中心に学ぶ。期間は15カ月。陸・海軍から選抜。

❹ 翻訳官短期養成コース
6カ月、または9カ月で文語及び軍隊用語を集中的に学ぶ短期コース。

❺ 軍総合コース
訊問官養成コース、翻訳官養成コースがそれぞれ会話と読み書きに特化した内容だったため、前線でもう片方の任務を行うことができないなどの問題が発生。これを受けて1944年に総合コースがつくられた。期間は約18カ月。

①から⑤のうち、最初に始まった政府給費生コースは、他のコースが軍人対象だったのに比べて学生対象だったこともあり、カリキュラムも比較的余裕があり、長期休暇もあったという。彼らはロンドン南東部にあるパブリック・スクール「ダリッジ・カレッジ」を寄宿舎として使用していたため、「ダリッジ・ボーイズ」と呼ばれるようになった。次は、このダリッジ・ボーイズがどのような日々を送っていたのか、見てみよう。

DulwichCollege_058443_3d54574f
Dulwich College, College Road, Dulwich.
cc-by-sa/2.0 - © Noel Foster - geograph.org.uk/p/58443

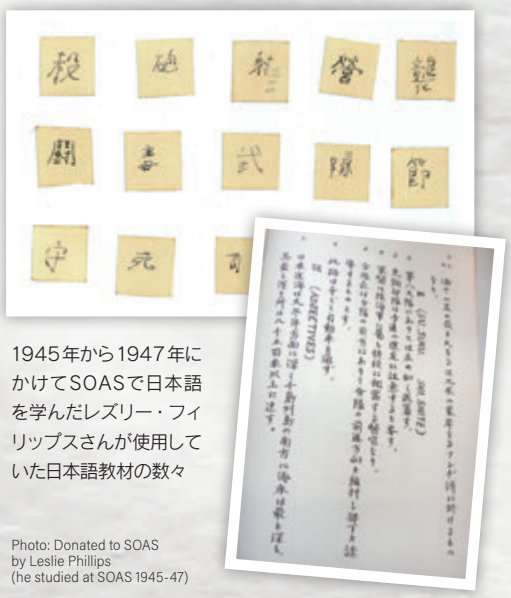
現在のダリッジ・カレッジ

ダリッジ・ボーイズの生活

ダリッジ・ボーイズは、語学に才のあるシックス・フォーマーたちだった。パブリック・スクール（名門私立校）やグラマー・スクール（公立選抜校）に通う、比較的裕福な家庭出身で、ラテン語やギリシャ語、ドイツ語など、別の言語を習得していた若者が集められた。ボーイズの一人、ロナルド・ドーアによると、クラスはいわゆるエリートが集うパブリック・スクール出身の生徒たちと、グラマー・スクールで学んだ生徒たちというように自然と二分されたという。英国の階級制度が、わずか30人のクラスにも反映されていたわけだ。

当然のことながら、カリキュラムはかなり厳しいものだった。生徒たちは、ダリッジ・カレッジから列車とバスを乗り継いで、当初はバッキンガム宮殿近くに位置していたSOASへ通学（コース途中でブルームズベリー地区へ移転したと見られる）。授業は月曜日から金曜日の間、午前が9時から12時まで、午後が2時から5時までで、宿題もあった。ただし、週2回は日本関連の講演に出席したり、日本映画を鑑賞する機会も設けられるなど、言語学習のみに限定せず、日本全般の知識を得られるよう、工夫がなされていたようだ。

それでは日本語学習はどのように行われたのだろう。大まかに区切ると、①ローマ字を使って日本語の初期会話を学び、簡単な翻訳や、蓄音機を使った発音練習などを行う、②話し方や書き方の実践的な訓練を受け、基本的な単語や重要な漢字を覚える、③「ナリ調」と呼ばれた軍隊特有の文体を習得する、④日本軍が実際に使用した公文書などを教材とし、集大成とする、という流れだったらしい。



1945年から1947年にかけてSOASで日本語を学んだレズリー・フィリップスさんが使用していた日本語教材の数々

Photo: Donated to SOAS
by Leslie Phillips
(he studied at SOAS 1945-47)

当時の教材を見てみると、我々日本人にとっても難解な漢字がずらりと並び、草書まで学んでいたことが分かる。いかに語学力に秀でた若者たちだったとはいえ、これだけの知識を身に着けるのは、並大抵の努力では成し得なかっただろう。そしてその目標達成のために大きな支えとなったのが、個性豊かな教官陣の存在だったのである。

個性豊かな教官たち

この戦時中の日本語特別コースが始まるまで、講師がわずか2人しかいなかったというSOASだったが、コースが開始されてから終了するまで、若者たちを教えた教官の数は合計39人。その中には英国人のみならず、在英邦人やカナダ軍から派遣された日系二世、そしてコースで学んだ後に教官として戻ってきた者などがいた。

教官陣の中心的存在だったのが、日本語主任講師だったフランク・ダニエルズ。駐日英国大使館で海軍武官として勤務した後に、日本の学校で英語講師として働いた経歴を持つダニエルズは、日本人の妻おとめとともに、熱心に生徒たちを教えた。そしてコースの精神的支柱だったと考えられるのが、ピゴット少将（フランシス・スチュワート・ギルデロイ・ピゴット）である。弁護士の父とともに日本に滞在したことのあるピゴットは、陸軍将校時代には日本陸軍との交換留学制度で日本に滞在し、その後も駐日武官としてたびたび訪日。日英同盟の終焉時には日本の立場を慮る発言を行うなど親日家だったピゴットは、引退後に軍とSOASから要請を受け、翻訳コースの主任として活動した。

蓄音機を使った発音練習などを行う上で大切なのは、正確な発音で日本語を話す人材。聞く、話す上で大きな力となったと思われるのが、在英邦人や二世たちだった。松川梅賢と簗田鉁次（やなだせんじ）という2人の日本人新聞記者や、戦後はBBC日本語放送のアナウンサーとして活躍した伊藤愛子（愛子クラーク）、英国駐留カナダ軍の二世4人など、教職以外の様々なバックグラウンドを持つ人々が、この特別コースを支えた。母国や愛する国が敵となり、そんな中で英国人に日本語を教えるという複雑な環境下、悩むこともあったようだが、そんな彼らが言語のみならず、日本人の精神性や日本文化を真摯に伝えたことが、若き生徒たちの後々の将来を左右することになる。

戦場でのコース修了生たち

日本語特別コース修了後、ダリッジ・ボーイズは陸・海・空軍のいずれかに配属され、他コース出身者は所属する部隊へと戻った。彼らは情報将校としての訓練を受けてインドへ。その後、インドやビルマ（ミャンマー）などで訊問官や翻訳官としての任務を遂行した。

戦場では訊問官は日本軍の俘虜に訊問を行って情報を収集し、翻訳官は俘虜から得た作戦命令や訓示、メモや日記などを翻訳する日々を送った。訊問官養成コースまたは翻訳官養成コースで学んだ者は、日本語能力に偏りがあったため、臨機応変な対応が求められる現場に混乱が生じることもあったという。しかし、戦時中の情報収集に加え、終戦直後には東南アジア各地における日本軍との連絡業務や日本人の内地送還などに従事。日本で進駐軍に参加する者も多く、日本語の知識を生かして任務にまい進していた様がうかがえる。

連合国側の勝利に貢献した彼らの真価はしかし、戦後に発揮されることになった。彼らの多くが戦後も日本語、そして日本への興味と愛着を持ち続け、言語や文化、歴史の専門家として活躍。また、学界にとどまらず、官界や財界にも活動の場を広げていったのである。

学界や官界、財界で大活躍

PA/PA Archive/PA Images

毎年、ロンドンで開催されている「ビジネス日本語スピーチ・コンテスト」と言えば、英国で日本語を学ぶビジネスマンたちの目標の一つ。コンテストの正式名称「Sir Peter Parker Awards for Spoken Business Japanese」にその名が冠されているピーター・パーカー（写真右上）は、ダリッジ・ボーイズのリーダー的存在だった。陸軍で少佐にまで昇進。除隊後はオックスフォード大学で学び、いくつかの企業や組織を経て、英国国鉄の総裁となった。欧州三菱電機の会長としても活躍。日本関連のプロジェクトに多数かかわり、1986年には調査報告書「未来に向けて－アジア・アフリカ言語及び地域研究に対する英国外交・通商上の要請に関する一考察」、通称パーカー・レポートを作成、日本研究及び日本語教育の拡大を訴えた。

もう一人のダリッジ・ボーイズ、ロナルド・ドーアはコース修了後、軍で基礎訓練を受けているときに病気になり、そのままSOASに残って講師となった。終戦後にロンドン大学を優秀な成績で卒業。SOASやロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）で社会学の教授を務めたほか、国内外の様々な大学で客員教授やフェローとして研究を続け、日本経済を専門とする社会学者として高い知名度を誇っている。

ヒュー・コータッツィは、訊問官養成コースでドーアに日本語を学んだ。外務省入省後、複数回の東京赴任を経て、駐日英国大使に就任。長年にわたる日本滞在時に、英国と日本各地の関係を研究し、複数の著作を発表した。また、随筆や論文なども数多く手掛けている。

このほかにも、能研究で知られるパトリック・オニールや、「宇治拾遺物語」の翻訳などを行った日本中世文学の研究者ダグラス・ミルズなど、日本と英国の架け橋となるべく将来を捧げた人物は枚挙にいとまがない。

冒頭で紹介した、2016年にSOASで行われたイベント、「ダリッジ・ボーイズとその後」には、当日91歳の誕生日を迎えたロナルド・ドーアと、その教え子ヒュー・コータッツィの姿があった。戦時中、敵国の言葉を学んでいたのに、なぜ日本に対する敬意を持っているのかと聞かれたドーアは、「簡単だ、なぜなら私たちは女性から日本語を学んだからね」と冗談を挟みつつ、こう答えた。「教師たちの使命は我々に日本語を教えることだった、だが同時に彼らは自分たちの文化に誇りを持っており、自信にあふれていた。彼らが持っていた敬意が私たちにも伝わっていったのだ」と。教材にも事欠く戦時中、敵国に打ち勝つために短期間で集中的に組まれた日本語特別コースで学ぶ毎日。しかし、教師たちの日本に対する愛情と敬意の糸は、縒り合わされ、太い絆となって生徒たちへとつながり、やがて戦後、そして現在の日本と英国を結ぶようになったのだ。

英国における日本語教育略史

＊国際交流基金などの情報を参考にして作成

1903年 英国最初の日本語学校（シャンド日本語学校）がロンドンに開校

1916年 ロンドン大学SOAS（当初は東洋研究所（The School of Oriental Studies））が設立（生徒の受け入れが始まったのは翌17年）。日本語教育が行われる

SOAS Library

1960年のSOAS校舎

1946年 SOASにおいて日本語の学士課程、BA Honours in Japaneseが新設

1947年 第11代スカボロー伯爵ローレンス・ラムリーが東洋・アフリカ研究の必要性を訴えた「スカボロー・レポート」を作成。これに基づき、ケンブリッジ大学（1947年）やオックスフォード大学（1962年）に日本語講座が設置されることとなる

1961年 ウィリアム・ヘイターが英国における東アジア研究の状況を調査。調査報告書「ヘイター・レポート」にて、イングランド北部に日本、中国、東南アジアを専門的に研究する機関を設置するよう訴える。これに基づき、日本研究センターがシェフィールド大学に設けられることとなる

1970年 公立中等教育機関であるバリー・セント・エドマンズ・カウンティー・アッパー・スクールで日本語教育が開始。英国の中等教育では初めての日本語教育とされる

1960～1970年代 語学学校を始めとする成人教育機関で日本語を教えるケースが見られるようになる

1986年 ダリッジ・ボーイズの一人、ピーター・パーカーが調査報告書「未来に向けて－アジア・アフリカ言語及び地域研究に対する英国外交・通商上の要請に関する一考察」（通称パーカー・レポート）を作成。外交・通商上の見地から日本研究及び日本語教育拡大の必要性を唱える

1988年 通商産業省（DTI）が対日輸出拡大を目的とする「オポチュニティー・ジャパン（Opportunity Japan）」キャンペーンを実施。高等教育機関での日本語、日本文化関係プログラムへの資金拠出が決定される。結果、88年から91年までの3年間で対日輸出額が80%増

「ナショナル・カリキュラム」が制定。日本語が選択できる19の外国語の一つとして指定される

1980年代末～1990年代初め 大学及び中等教育機関において日本研究講座、日本語の授業が増加

1995年 中等教育機関が現代外国語を専門にすることができる「ランゲージ・カレッジ（Language College）」認定制度がイングランドで導入。認定校の約7割が日本語教育を取り入れる

1990年代半ば 政府助成金の大幅な削減により、いくつかの大学で日本研究・日本語講座が縮小または廃止

2007年 外国語能力を技能別に認定する基準「ランゲージズ・ラダー（Languages Ladder）」が発表

2014年 初等教育（KS2）から外国語が必修となる

情報機関の秘密のベールに包まれた

SOASで学んだ7人のブレッチリー・ガールズ

戦後、日本にかかわる各分野で華々しい活躍を見せたダリッジ・ボーイズら日本語特別コースの男子生徒たち。その一方で、同じ時期、同じ場所で日本語を学びながら、その存在が長年にわたり秘匿された女性たちがいた。彼女たちの活動が世に知られるようになったのは、わずか数年前のことだ。次からはこの秘密のベールに包まれた女性たち7人を中心に、戦時中の情報機関に勤めた女性たちに注目してみたい。

SOAS Library

SOASで日本語を学んだ7人のブレッチリー・ガールズ

「私の母はブレッチリー・ガールズの一人でした」

2016年2月1日にSOASで行われた日本研究開始100周年記念のイベント、「ダリッジ・ボーイズとその後」の質疑応答の最後、観客席にいた一人の女性が、日本語の辞書を片手に話し始めた。いわく、「私の母親はブレッチリー・パークでこの辞書の編纂をしていたのですよ」。辞書の編者として名前は残されていないものの、第二次大戦中、政府暗号学校ブレッチリー・パークの日本セクションで働いていたという母親の名はアイリーン・クラーク、彼女こそ、ダリッジ・ボーイズと同時期にSOASで日本語を学んだ7人の女性たち、「SOASのブレッチリー・ガールズ」の一人だったのである。

世界各国の暗号を解読する政府暗号学校

ロンドンから列車で約1時間。イングランド南東部バッキンガムシャーにある豪奢な邸宅、ブレッチリー・パークには、第一次大戦後から戦後の1946年まで政府の暗号学校（GC & CS）が置かれていた。第二次大戦時にアラン・チューリングを中心とする数学者らがナチス・ドイツのエニグマ暗号の解読に成功した功績が描かれた、2014年公開のベネディクト・カンバーバッチ主演映画「イミテーション・ゲーム / エニグマと天才数学者の秘密」で世界中にその名が知られるようになったが、エニグマ暗号以外にも世界各国の暗号解読に従事。パーク内には日本セクションも置かれていた。

Picture by: Topham/Topham Picturepoint/Press Association Images

第二次大戦中に政府暗号学校が置かれたブレッチリー・パーク（1955年撮影）

英国は1920年代から日本の暗号解読に携わっており、上海、香港、シンガポール、そしてブレッチリー・パークで作業が行われていた。その中心人物だったのが、ジョン・ティルトマン。ブレッチリー・パークの軍事セクションの責任者で、暗号解読者として英国にその名を轟かせた人物である。日本海軍のJN-25暗号などの解読に成功していたティルトマンは、1940年代初めに日本軍が破竹の勢いでマレー半島及びシンガポールを支配下に治めたのを受け、SOASに対して日本の暗号解読に必要となる読み書きの力を養う日本語コースを組んでほしいと依頼。しかし平常時で5年、緊急時でも2年はかかると言われ、自分自身でコースをつくることを決意する。

1942年2月、ロンドン郊外のベッドフォードで始まった日本語コースの期間は6カ月。初回は女性1人を含む計23人が学び、その大多数がオックスフォード大学やケンブリッジ大学で古典を学んでいたそうだ。唯一の目的が暗号解読だったため、話すことは教えられず、読み書きにのみ焦点が当てられた同コースで、生徒たちは計1200単語を暗記した後、暗号解読の練習を1カ月、行った。このコースは終戦まで続けられ、1943年にはパーク内でスタッフ向けにも同様のコースが設置されたという。

ブレッチリー・パークの女性たち

ここで、SOASで日本語を学んだ7人の女性たちに話を進める前に、「ブレッチリー・ガールズ」と呼ばれた、ブレッチリー・パークで働いていた女性たち全般について述べておきたい。第二次大戦中、驚くことにパークで働くスタッフの実に75%が女性だった。男性が兵士として戦場に赴き、英国内で人員が不足したこともあり、貴族階級や富裕層の子女「デビュタント」や、大学のフェローやチューター「ドン」が雇用される。しかしその後も需要は増大し、王立婦人海軍（Wrens）や婦人補助空軍（WAAF）、補助地方義勇軍（ATS）の女性たちや、秘書学校の卒業生らが集められることになった。

女性たちは数こそ男性を凌駕していたとはいえ、暗号解読者として後世に名を残した者は数少なく、先述の映画「イミテーション・ゲーム～」でキーラ・ナイトレイが演じたアラン・チューリングの同僚ジョーン・クラークほか、数名である。反復的な業務に就くケースが多かったようだが、エニグマ暗号解読機「ボム」や、暗号解読用のコンピューター（電子計算機）「コロッサス」の操作を行っていたのが主にWrensであったことなどからも分かるように、彼女たちがここブレッチリー・パークで果たした役割は決して小さなものではなかった。

Crown copyright, reproduced by Kind Permission, Director General, GCHQ

エニグマ暗号解読機「ボム」を操作するWrens

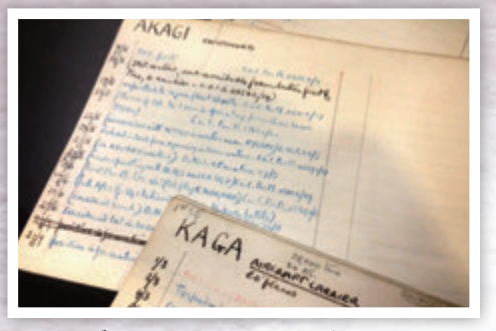
SOASで学んだ「ジャッピー・ワーフ」たち

さて、日本の暗号解読に話を戻そう。1943年9月、イタリアが降伏すると、英国はこれまで以上に日本へ注力するようになり、ブレッチリー・パーク内の日本セクションも拡大。このころ、WAAFは7人の女性たちをSOASへと派遣する。

SOASで日本語を学ぶために集められた7人の女性たち、メアリー・ウィズビー、アイリーン・クラーク、エブリン・カーティス、シシリー・ナイスミス、デニース・ギフォード＝ハル、マーガレット・ブラブズ、ペギー・ジャクソンは、いずれもこれまで日本語を学んだことがなかった。SOASに行き着くまでの経緯は様々で、例えばウィズビーは、オックスフォード大学に進学予定だったが、戦時下に国のために何かしたいとWAAFへの道を選択。訓練を受け、ケンブリッジ大学に派遣されて心理学を学んだ後に、幾度かの面接を経て、SOASで日本語を学ぶよう指示を受けたという。

集められた7人の女性たちは、ロンドン中心部ハーレー・ストリート近くにある英空軍の宿舎に寝泊まり

し、SOASへ通う生活を送るようになった。14番のダブル・デッカーに乗り、ほかの乗客たちの好奇の目にさらされながら、かなが書かれたカードを使って互いをテストし合いながら学校に通う日々。期間は6カ月で、日本語の日常会話を学ぶことなど皆無。「こんにちは」は知らずとも「戦闘機」という単語は分かるという偏った学習内容だったようだが、それまでほとんどが家を出たことがなかった彼女たちは、合宿のような感覚で仲良く毎日を過ごした。ちなみにSOASで学んだ7人のブレッチリー・ガールズは「ジャッピー・ワーフ（JappyWaaf）」とも呼ばれるが、この呼び名は彼女たち自身の命名だそうだ。



ブレッチリー・パークに展示されている
日本セクションの資料

日本語コース修了後は、全員がブレッチリー・パークへ。ウィズビーだけは一足早く、コース開始の約3カ月後に一人学校を去ることとなり、どこに行くのかも知らされぬまま指示通り列車に乗り、到着した先がブレッチリー・パークだった。翌日には日本海軍セクションに配属され、呼出符号の索引作成を行ったという。そして3カ月後には残る6人もやって来て、再び7人が集結。皆が日本の暗号解読に携わることになったが、秘密保持の観点から極端な分業体制で、互いに何をしているのかはもちろんのこと、自分がどんな仕事をしているのかすら、包括的に把握することはできなかったそうだ。分かっていることと言えば、例えばウィズビーが呼出符号の索引作成の次に命じられたのは、日本の陸軍航空部隊の戦力組成を探る作業。また、クラークが日本語の軍事用語をまとめた辞書作りに携わったことなど、いずれも本人またはその家族から明らかにされた断片的な情報のみである。

50年以上の年月を経て情報開示

SOASの日本語教育研究学科（Applied Japanese Linguistics）の准教授（Reader）で、SOASのブレッチリー・ガールズについて研究を行っているバーバラ・ピッツィコーニさんは、ダリッジ・ボーイズを始めとする、SOASの日本語特別コースで学んだ男子学生らとは対照的に、彼女たちの記録は非常に少なく、同校にも残っていないと語る。理由の一つとしては彼女たちの勤務先が情報機関だったことが挙げられる。ブレッチリー・パークに勤務する人々はすべて国家機密法（Official Secrets Act）の下、活動内容を公にすることが禁じられていた。1975年になってようやく自由に話すことが認められるようになったものの、それでも詳細を明かす人は少なかったそうだ。あとはやはり、当時の女性の常として、キャリアを追うよりも家庭に入る人が多かったこともあるだろう。7人の中ではウィズビーが結婚後も情報機関に勤めたが、ほかの6人のその後についてはほとんど知られていない。

戦時中にブレッチリー・パークで活躍した人々の多くは既に亡くなっているが、健在の方々もいる。旧姓メアリー・ウィズビー、結婚後はメアリー・エブリーとなったメアリーさんもそんな一人。90歳を過ぎたメアリーさんに当時のエピソードを聞いたバーバラさんによると、彼女たち7人は非常に仲が良く、終戦後には結婚するなどして離ればなれになったが、年に一度は会って旧交を温めていた。「2人は南アフリカ、また別の2人はスコットランド、そのほかヘレフォードに1人とアイルランドに1人。そしてメアリーさんはロンドンからオックスフォードへと、皆ばらばらだったときにも連絡を取り合い、毎年6月にはどこかで会っていたそうです。それでも50年が経つまでは互いの仕事のことは全く話さなかった。家族にも言えないのであれば、せめて同じ場所で働いていた同僚くらいには話したくなるのではないかと思うのですが、すごいことです。私には想像もできません」。

Screenshot courtesy of Dr Barbara Pizziconi

当時のエピソードを語るメアリー・エブリーさん

メアリーさんはほんの数年前、日本人による取材を受けた。なんとそのときに初めて日本人と会ったという。対日本の諜報活動にかかわっていたことから、日本人からどのように見られるか、不安もあったようだが、初めて見るはずの日本人に違和感がないことに驚いたそうだ。

光が当たり始めた女性たちの活躍

2017年現在、メアリーさんを除く6名がその生涯を閉じている。50年という長い沈黙の年月を経て、メアリーさんがSOASでたった3カ月学んだ日本語とその教育内容の記憶は、既に薄れている。機密を徹底的に守ったという点では理想的なのかもしれないが、彼女たちを含むブレッチリー・ガールズの活躍の大部分が今もなお、秘密のベールに包まれたままというのは残念だと言わざるを得ない。だが、彼女たちに対して2009年に戦時中の功績を称える金と青色のブローチが授与され、数年前にはブレッチリー・ガールズに関する数冊の本が出版。このタイミングで彼女たちの存在に、ほのかではあれ光が当たったのは、幸運だとも考えられるだろう。

現在の日英関係を支える礎となった、ダリッジ・ボーイズを始めとする日本語特別コースの男子生徒たちの華やかな活躍に比べ、SOASのブレッチリー・ガールズの活動は地味で、ささやかなものだったかもしれない。バーバラさんは言う。「ダリッジ・ボーイズが言語だけでなく、文化を学ぶ機会もあったのに比べ、彼女たちは記号としての日本語にさらされただけで、興味が湧くきっかけもなかったのだと思うのです」。コース修了後も、ブレッチリー・パークにおいて完全な分業体制の下で作業していたのだから、日本の言語や文化に知的好奇心が掻き立てられることも少なかっただろう。しかし、戦時中の英国で日本語を学んだ女性たちがいたことは、英国、そして日本の歴史の1ページに刻まれるべき事実なのである。

ブレッチリー・パークにおける主な日本の暗号解読の軌跡

1934年11月	外務省使用の暗号機A型、通称「レッド暗号」を解読
1939年夏	ジョン・ティルトマンが海軍使用のD暗号「JN-25」を解読
1941年2月	外務省使用の暗号機B型、通称「パープル暗号」を解読した米国が、ナチス・ドイツのエニグマ暗号解読の情報と引き換えに、解読機を英国に供与
1943年春	海軍武官使用の九七式印字機三型（JNA-20）、通称「コーラル」暗号を、エニグマ・セクションの責任者ヒュー・アレグザンダーを中心としたチームが米国とともに解読

ブレッチリー・パーク内の日本セクション

ブレッチリー・パークでは1920年代から日本の暗号解読が行われていた。当初は日本海軍セクションがブレッチリー・パーク近くのエルマー・スクールに設置。1942年9月にパーク内へと移り、1943年2月にはハット7に拠点が置かれるようになった。

ヒュー・フォス率いるハット7と、ジョン・ティルトマン率いる軍事セクションで日本の暗号解読作業が進められたが、1943年9月にイタリアが降伏した後は、日本セクションが大幅に拡大。より大きなブロックFへ移動した。ブロックFには多くのセクションが設けられたうえ、更に細分化されていたため、別のセクションで何が行われているのかは全く分からなかったという。

長い廊下が続くブロックFは、ビルマから中国南西部まで717マイル（約1150キロ）にわたって伸びる英国軍の供給路になぞらえて、「ビルマ・ロード」と呼ばれていた。なお、ブレッチリー・パークには現在も複数のハットやブロックが残り、内部が見学できるようになっているが、ハット7、ブロックFはともに取り壊されている。

Bletchley Park　ブレッチリー・パーク

1938年から1946年まで政府暗号学校が置かれたブレッチリー・パーク。長官のオフィスなどが置かれた豪奢な邸宅「マンション」を始め、ナチス・ドイツの暗号機「エニグマ」や、エニグマ暗号を解読する「ボム（Bombe）」のレプリカなどが展示されているミュージアム、アラン・チューリングら暗号解読者らが働いていた「ハット」などを見学できる。

9:30-17:00（10月31日まで。11月1日からは16:00まで）
£17.75（1年有効）
Sherwood Drive, Bletchley,
Milton Keynes MK3 6EB
Tel: 01908 640404
Bletchley Park駅
https://bletchleypark.org.uk

Shaun Armstrong/Mubsta.com